

## 学会長挨拶

立命館大学食マネジメント学会 会長

立命館大学食マネジメント学部 学部長 朝倉敏夫

食マネジメント学部が設立して3年が経った。今年度は、新型コロナ禍のなかで、大学の存在そのものがきわめてむずかしい状況にあったが、学生諸君、教職員のみなさんが一丸となって、研究・教学に立ち向かっていただいた。まずは、みなさんに感謝したい。

さて、本号は学部が創設されて3年目の記録であり、通巻3号となる予定であったが、今年度は私を含め井澤教授、松原教授と、3名の退任記念号がそれぞれに刊行されたため通巻6号となった。

研究においては、例年どおりシンポジウムを食総合研究センターと協力して行った。7月11日に「味わいの発達と味覚教育」、8月21日に「食の嗜好とウェルビーイング—五感を通じた食の喜び」、9月9日に「人間にとって嗜好品とは何なのか」、12月11日に「食と観光」といった国際シンポジウムを開催した。本号では、前2者のシンポジウムの講演報告を掲載した。いずれも新型コロナのため、オンラインによる開催となった。ことにジャック・ピュイゼ氏は、ご高齢にもかかわらず来日していただくことになっていたが、それがかなわなかったのは残念であった。しかし、オンラインにより、ご登壇いただけたことは不幸中の幸いであった。

また、2021年1月21日に本学会主催で小田一彦氏に「京野菜ブランド戦略と地域活性化—京都の強みを生かし、オンリーワンを目指す!」と題し講演していただき、本学会の学生委員が質問をする形をとった。その講演が本号の掲載に間に合ったのは幸いである。

このほか、2021年1月初めから阿良田麻里子先生と吉積巳貴先生を中心としてノースウェスタン大学との協力協定に基づく成果発信プログラム「食・農の社会開発と科学技術」が始まり、3月8日にその掉尾を飾る国際シンポジウム「Beyond コロナ時代の『食と農』」が開催された。さらに立命館大学EDGE + Rプログラムの一貫として2020年8月に立命館小学校との小学校高学年対象のオンラインワークショップ「Tomato Adventure」が野中朋美先生、石田雅芳先生、本田智巳先生により開催され、海外とのライブ中継など連携セッションを行う「食」を通じた創造性教育として脚光を浴び、ひきつづき2021年1月に立命館附属校中学生対象の「Lemon Adventure」も開催された。

本号でも前号に引き続き、ゼミナール大会テーマ一覧と学会の活動報告とを掲載した。新型コロナ禍のなかで、学生たちの研究活動がかなり制限された。なかでも1年生は、入学してキャンパス生活をほとんど送れないなかで、ゼミナール大会での発表のための共同研究にがんばってくれた。学生の活動としては、新型コロナ禍のなかで下宿する学生のためにご寄付いただいた米150kgを学生委員が率先して学生に配布する作業にとりくんでくれたり、年末には、本学部の学生がアイデアを出した2019年度の「滋賀ぎゅっとおみやげコンテスト」の入賞作品が製品化されるといったうれしいニュースもあった。

来年度は、いよいよ1期生が卒業年度を迎えるので、卒業研究を公開する『立命館食科学学生論集』も刊行されることになるという。そうすると本誌では、これまで以上に教員の研究活動を活発に広報してほしいと思う。たとえば、本年度には、私の知る限りでも、新山陽子編「フードシステムの未来へ①②③」(昭和堂)として『フードシステムの構造と調整』『農業経営の存続、食品の安全』『消費者の判断と選択行動』、新村猛・野中朋美・國枝里美編のService Engineering for Gastronomic Science (Springer Singapore)、田中浩子編著『食生活のソーシャルイノベーション』(晃洋書房)など、本学部教員が執筆した図書が刊行されている。さらに本学部教員を中心とする執筆陣による【シリーズ食を学ぶ】(昭和堂)も次々と刊行される予定である。こうした出版物の紹介や書評を本誌でとりあつかうというのは、どうだろうか。

さて、私は学部が創設されてから学部長として3年が経ち、今年度をもって退職となる。そこで、この3年間の学部組織をふりかえってみたいと思う。組織の運営を支えてくださった3人の副学部長と1人の学生主事からなる執行

部の皆さんにお礼を申し上げます。

初年度は、立命館文化を熟知し、本学部設立に尽力して下さった先生方に執行部をお願いした。副学部長を経済学部からの谷垣和則先生（企画担当）と政策科学部からの早川貴先生に、学生主事をスポーツ健康科学部からの小沢道紀先生にお引き受けいただき、学部創設に1年先立って理工学部に籍をおいていた和田有史先生にもう1人の副学部長に加わってもらった。2年度は、継続性を保つために副学部長は谷垣先生、早川先生（企画担当）に留任していただき、新しい風を期待して和田先生に代わって荒木一視先生が加わり、学生主事は1年任期であり、小沢先生に代わって保井智香子先生になっていただいた。3年度は、荒木先生（企画担当）が留任し、2年の任期を終えた谷垣先生、早川先生に代わり、天野耕二先生、田中浩子先生に、学生主事は木村裕樹先生になっていただいた。執行部の人事に対しての私の考え方は、マネジメント、カルチャー、テクノロジーの分野を考慮しつつ、任期を越えず、多くの方に執行部の職務を経験していただくことを基本とした。

ちなみに「食マネジメント学会」の常任委員は、学部長、企画担当の副学部長、学生主事が担当し、本学会の紀要である『立命館食科学研究』編集委員会の委員長は3年間続けて松原豊彦先生が、事務長は毎年度交代し、阿良田先生、小沢先生、早川先生が担当してきた。

学部の運営は、教員だけでは動かない。事務職員の方についても記録にとどめ、感謝の意を表したい。本学部の創設にあたって、新学部創設準備委員会の初代事務長になられたのは吉井直宏氏である。吉井氏は、1992年に本学に就職され、2007年に設立した映像学部の事務長、国際協力事業課長、国際連携課長などを歴任し、2015年12月に食科学部設置準備事務局（後に食マネジメント学部設置準備事務局と改称）の課長に赴任した。当時、準備事務局には森本康太郎氏と富田沙樹氏の2人が職員であり、その仕事を補佐すべく2016年4月から専門職として佐原三恵氏、7月から事務職として平田裕子氏が加わった。佐原さんはル・コルドンブルーなど海外との折衝に力を発揮していただき、平田さんはやさしい微笑みをもってすべての事務が円滑に動くように支えてくださった。その後、2018年10月に森本氏が大阪国際大学に専任講師として転出され、2019年10月に富田氏が総合企画部に異動となった。



食マネジメント学部初代事務長 吉井直宏氏 近影



その間、2018年1月に中野亮佑氏、11月に田中伸弥氏が、2019年4月に寺井光子氏が、2019年11月に小森愛子氏（現在、産休中）が、2020年6月に藤谷奈生氏が、2020年11月に尾場瀬理沙氏が加わった。そして、この2020年11月をもって、吉井氏が一貫教育部付課長（北海道諸島教育準備担当）として異動することになり、田中氏が課長職を引き継ぐことになった。

2021年度から、天野先生を学部長とする新たな執行部と田中氏の率いる事務のみなさんによって、学部組織も新たな体制となる。また、4月から大学院の「食マネジメント研究科」が設置される。その事務相談のために、谷垣先生、吉井氏、田中氏とともに文部科学省に行き、その帰りに4人で飲んだコーヒーの味は忘れられない。「食を学問にする」という本学部のミッションを進めるなかで、新しい歴史を紡いでいかれることを期待している。

私の在籍中お世話になった本学部のすべての皆さんにこの場を借りてお礼を申し上げる。加えて、研究面において本学部を支えてくれた食総合研究センターの南直人センター長、前身の国際食文化研究センターから事務をとってくださっている高田由美さんにも感謝を述べたい。

そして、食マネジメント学部と食総合研究センターが中心となり、他学部の食研究者のみなさんの力を結集して、立命館大学が日本の「食」研究の礎として、今後もさらなる発展をすることを願って、私の役割を終えさせていただく。

みなさん、ほんとうにありがとうございました。

## 2020年度食マネジメント学会の活動

本年度はコロナウイルス感染症の拡大で学生の活動が大きく制限を受けた。また、入構制限もあり、総会は秋学期が始まってからオンラインでの開催とせざるを得なかったため、実質的な活動は秋学期以降となった。そうした中でも以下の活動を実施することができた。

- 1 機関誌などの編集および刊行：「立命館食科学研究」第3号を刊行した。また、退任を迎える朝倉学部長、井澤教授、松原教授の特集号をそれぞれ刊行した。
- 2 食マネジメント学会学生活動奨励金：食マネジメント学部学生の自主的活動を支援するための「食マネジメント学会学生活動奨励金」を、以下の団体に支給した。「食文化調べ隊」「UM」「食マネもぐもぐ日記」「ORGANiC」「プロジェクトS」また、本年度はコロナウイルス感染症の拡大を踏まえて、従来の団体での申請に限らず、個人申請も認めることとし、上記とは別に一件の個人の企画に奨励金を支給した。
- 3 キャリア講演会企画：大類知樹氏を迎えて実施した。

